

書 評

張 天弓著

『張天弓先唐書學考辨文集』

成 田 健 太 郎

京都大學

改革・開放以來、中國大陸の書法界は文革の傷手を克服して目覚ましい發展を遂げ、學習人口の激増や書法作品の商品價值高騰により、まさに未曾有の活況を呈している。

また、高等教育機關の書法學科・專攻設置數の増加にともない、書法學研究者の數も増え、それは同時に研究論文の量産をもたらしっている。改革・開放から九〇年代初め頃までの書法學界の動向は、大野修作氏の「中國における書論研究の現状と課題」（本誌第四十八冊、一九九四年四月）に詳しく、このなかで大野氏は當時の書論研究の全體の傾向と

して「きつちりと考證、作品分析を行ない、注を具えたものもあるが、それらはまだ少數派である」ことや「堂々めぐりの似たり寄つたりの論文の多さ」を指摘し、「今後は注をしつかりと書くことで先行の業績を謙虛にうけとめ、それを越えるものを發表する」よう要望している。これ以降現在に至るまで、書學研究の質は向上を見せており、大野氏の要望に適う論文は多數派になったとはいえないまでも、十分に増えてきているといつてよいと思う。

このような時期にあつて、先行業績の把握と丁寧な考證を特徴とする論文を書く研究者としてすぐに思い浮かぶのが、本書の著者張天弓氏である。本書の「作者簡介」によれば、著者は一九五三年生れ、現在中國書法家協會學術委員會委員、湖北省書法家協會副主席兼學術委員會主任を務める書法家である。研究歴としては、一九八八年に書法理論の專著『書法學習心理學』（中國文聯出版公司）があり、ほかにも書法美學關連の論文を多數發表しているが、著者自ら曰く一九九〇年に興味を古代書論史研究に移し、その成果を一九九二年頃から『中國書法』『書法叢刊』『書法研

究』『書法報』等の書法雜誌・新聞や「全國書學討論會」等の學術會議において陸續と發表している。それらの論文を精選して整理編集したのが本書であり、本稿はその書評としての意味だけでなく、大野氏の報告以降の中國大陸における書論研究の様相を回顧する意味合いを持つてくれることを期待している。というのも、思うに書法美學から古代書論へという著者の針路變更は、ある意味この時期の書法學界全體の動向を反映しているからである。

本書所収「書法美學與傳統書論」も言及するように、書法美學研究は改革・開放後の「書法熱」と「美學熱」によって勃興した學問分野であり、現在に至るまで聞かれる「學科建設」の語はその空氣をよく物語っている。大野氏は、一九九〇年頃から「書の本質は何か（中略）」という根本的な問いかけの論調が主流となってくる」と述べ、しかも書法美學等にかかわる論は九〇年以前でも突出して多かったと附け加えている。そして大野氏が舉げるこのような論調を反映した論文のなかには、古代書論を手がかりとして書法美學の論を展開する試みもすでに少なくなかった。

つまり九〇年前後頃を、書法美學の材料として古代書論に光が當りはじめた時期と考えてよいと思う。

このように、書法美學研究の手がかりの一つとして古代書論が用いられはじめたことは、古代書論の讀み方に、現代書法にも通じるエッセンスを抽出して理解しようとする傾向をもたらした。この傾向は「學科建設」にとって必要なことではあったのだが、現代書法が傳統として直接受け継ぎえているのはせいぜい晚清書法であり、それと漢魏晉唐の書論を安易に結びつけ、時代背景やコンテキストを無視して恣意的に讀むようなやり方さえまかり通ってしまえば、かえって書法美學の健全な發展を阻害する要因ともなりかねない。そこで、美學的思索への昇華はひとまずおいで、古代書論それ自體に對してきつちりとした分析を行い、その價值を確かめようとする動きが興つたのは當然の成り行きといえる。

著者自身は二〇〇一年に本書所収「書法美學與傳統書論」において、書法美學は近年困境に行き當っていると述べたうえで、自身の古代書論への針路變更を回顧しその動

機についてこのように語っている。書法美學の核心は他の藝術ジャンルの美學理論や文藝美學、ましてや西洋美學から引つ張ってくることはできない、中國書論史の原貌を正確に描き出しつつ、古代書論のエッセンスを書法美學の學科建設に活かさねばならない、と。ところが古代書學文獻の考辨は豫想よりはるかに難しく、十年の時間をほぼこの仕事に費やすことになったが、書法美學への思考を中断したことはないという。著者は今や専ら古代書論考證の専門家として名を馳せているが、その思考が書法美學の勃興と模索という時代相を反映していることは、本書を読むにあたって念頭に置いておかねばなるまい。

前置きが長くなったが、以下本書の内容の紹介に移りたい。まず、本書は四十三篇の論文を収め、その大多数は古代の書學著作に考證・辨偽を加えるものであり、およそ以下のような著作を考辨の對象としている。

後漢 班固『與超書』（『書斷』能品・徐幹條所引）

書 評

崔瑗『缶上座右銘』

超壹『非草書』

蔡邕『筆賦』『九勢』『筆論』

鍾繇『筆法』

韋誕『奏題署』等

魏 皇象『與友人論草書』

東晉 劉劭『飛白書勢』

王羲之『自論書』『筆陣圖』等

宋 羊欣『采古來能書人名』等

虞龢『論書表』

南齊 王僧虔『論書』等

蕭子良『古今篆隸文體』

王愔『文字志』

馬澄『逸少正書目錄』

梁 陶弘景『與梁武帝論書啓』

袁昂『古今書評』

蕭衍『答陶弘景論書啓』『觀鍾繇書法十二意』

隋 智果『心成頌』

唐 太宗『筆意』

顏真卿『張長史十二意筆法』

一應はこれをもつて目次の紹介に代えさせていたが、以下いくつか附言しておきたい。まず、論文の次序はそれぞれの著作の作者にあたる人物の年代によって概ね右のように配列されているが、當然ながら作者について疑問のある著作も多く、その一部は考辨の結果唐以降の偽作と断定されている。また、そもそも唐人を作者とする著作についての論文は「先唐書學考辨」ではないので、「附錄」に

收められている。一方、唐・張彥遠編『法書要錄』のテキストについての考辨「關於《法書要錄》原本の探索」は、先唐書學文獻に關わる部分が多いので本篇に收められている。また、各著作を單獨で取りあげた考辨ばかりでなく、西晉・衛恆『四體書勢并序』ほか十六篇の辭賦文體の著作を扱った「先唐詠書辭賦研究」や、南齊永明年間の書學著作についての綜合的論考「『永明書學』研究」等もある。なお、本書に專論として收められていないものを含め、著

者はあらゆる先唐書學文獻について考辨を加えており、その結論は「略論先唐書學文獻」の末尾に「秦漢魏六朝隋主要書學文獻一覽表」としてまとめられ、各著作の成書年代、存佚狀況、眞偽の判定および偽作の作偽年代の欄に著者の意見が集約されている。概論としてはこのほかに「略論中國古代書法理論批評自覺的問題」があり、また「古代書論研究隨想」やすでに言及した「書法美學與傳統書論」のようない意見表明の論も收められている。

「一覽表」にはじつに百十四種の著作の名が連なり、書學文獻について時代を限つてとはいえこれだけ網羅的な文獻學的考察が行われたのはおそらく初めてのことであろう。著者によるこれらの考察は従来個別に論文として發表されてきたものであり、すでに研究者の間で廣く利用されているが、同一の著作について論文を數度發表しその都度論を修正していることもままあるため、こうして著者自身の精選と補訂を経た論文集が刊行され、一度にその全貌を窺うことができるようになったのは大變喜ばしいことである。ところで、これらの論文の初出年月を確かめてみれば、

著者の考究の軌跡を追うこともできよう。一九九二年から九四年頃に發表された論文は、蔡邕『九勢』『筆論』、鍾繇『筆法』、王羲之『筆陣圖』等、王僧虔『筆意贊』、智果『心成頌』、唐太宗『筆意』、顏真卿『張長史十二意筆法』といった筆法論についての考辨がほとんどである。これらの著作はさきに述べた書法美學研究において早くからしばしば参照され、そのわりに偽作の可能性が明らかに高いということで、著者にとつてはまずもって論及せずにいられない課題となつたのではないだろうか。著者はこれらについて、一九九五年の「趙壹《非草書》質疑」あたりを皮切りに、『采古來能書人名』や王僧虔『論書』等、書論史上特に重要な著作の考辨に取り組みはじめたようである。これらの著作は往々にしてかなり複雑な文獻學上の問題を孕んでおり、偽作の證明よりもさらに綿密な論證が要求される。著者自身本書の「後記」において、考證の重點は「證偽」からそれよりもはるかに難しい「證明」に移つたと回顧している。そして二〇〇一年の「『永明書學』研究」と「略論中國古代書法理論批評自覺的問題」は、中國におけ

る書法理論あるいは書法批評の「自覺」時期を通説の二世紀後半（後漢後期）から五世紀末（南齊永明年間）へ大膽に引き下げる論であり、著者の古代書論研究のハイライトともいえる。その後も著者は考究の範圍を廣げ、本書の収める最新の論文「論蕭子良《篆隸文體》日本鎌倉抄本」では、中國では元代頃までに佚した南齊・竟陵王蕭子良撰『古今篆隸文體』の毘沙門堂藏抄本を扱うに至っている。

著者による先唐書學文獻の考辨は多岐にわたり、それぞれ紹介に値するものであるが、本稿では本書を一體的に讀み著者の論を総合的に把握する意味で、さきに言及した「略論中國古代書法理論批評自覺的問題」の土臺となる「趙壹《非草書》質疑」「趙壹《非草書》質疑續」「羊欣書學論著考評」「『永明書學』研究」の考辨に注目してみたい。

「趙壹《非草書》質疑」（一九九五）と「趙壹《非草書》質疑續」（二〇〇九）が考辨の對象とする『非草書』は、唐・張彥遠編『法書要錄』卷一に收められ、「後漢趙一」の作と記されている。内容は、本來手早く書寫するために

生れた草書を張芝の草書の流行に追隨する西州（隴西地方）の人々がかえってゆつくり書いてゐる現狀を痛烈に批判した議論文である。『後漢書』文苑傳下・趙壹傳に引用・言及はないが、從來『非草書』は一般にこの趙壹の作と考えられてきた。著者は二篇の論において趙壹作者説の矛盾點をいくつも指摘し、從來の認識を眞つ向から否定している。また『書斷』の言及内容から見て、張懷瓘の見た『非草書』も現行本とは異なっていたはずだと述べ、現行本『非草書』の信憑性に徹底して疑問を呈している。しかし、現行本『非草書』が趙壹の原著を改竄したものであるのか、まったくの偽作あるいは偽託であるのかという點についてはさらなる探究が待たれるとして、「一覽表」では眞偽について「竄改」、作偽年代について「不詳」と判定している。

趙壹作者説に對する著者の批判は綿密かつ丁寧で參照價值が高いが、現行本に至る作偽過程についての控えめな態度にはやや物足りなさが残るかもしれない。このことには大まかに言つて二つのことが關係しているように思う。一

つは『非草書』を古代における書法藝術の自覺、さらには書法批評の起點とする書法史學の常識を覆すことに考辨の目的が置かれてゐることである。この目的は、現行本『非草書』が少なくとも趙壹の原著ではないことを證明することではば達せられてゐるのである。もう一つは、作偽の過程について探究を深めようとすれば、さらに複雑な問題に取り組まざるをえなくなることであり、言及こそないものの著者はこのことを十分に認識してゐるはずである。さらに複雑な問題とは、『非草書』と他の先唐書學文獻に共通する引用や記事の存在である。たとえば、張芝が自らの書を杜操・崔瑗には及ばないが羅暉・趙襲には優ると評したという記事は『非草書』だけでなく『采古來能書人名』等の書學文獻にも見え、それらの先後關係は考察に値しよう。しかし後述のように『采古來能書人名』もまた文獻學上の問題を孕んでゐる。このため、個別の記事の來歴は文獻の成立時期の問題と切り離して、それこそ個々別々に考辨してゆかなければならない。著者の『非草書』に對する考辨の次に求められてくるのは、『非草書』を價值のない偽作

として排除することではなく、その個別の記事についてさらに綿密な考察を加えることであらう。

「羊欣書學論著考評」(二〇〇〇)において最も注目されるのは、『采古來能書人名』に對する考辨である。『采古來能書人名』は『法書要錄』卷一に收められる書人列傳型書論である。題目は「宋羊欣采古來能書人名」とあるが、その下に「齊王僧虔錄」との注があり、本文冒頭の記述の文意の取りづらさも相俟つて、その作者が羊欣なのか王僧虔なのか未だ定見を見ない。著者は『法書要錄』本のほか、北宋・朱長文編『墨池編』本、『太平廣記』による引用、元・陶宗儀『說郛』、清刊本『書苑菁華』の清・汪汝璥按語、清・嚴可均『全齊文』、余紹宋『書畫書錄解題』、錢鍾書『管錐編』、常漢平氏の說(『書法研究』一九九九年第一期)『采古來能書人名』作者考略」を精査したうえで、羊欣の原著『能書人名』は早くに佚し、現行本『采古來能書人名』は唐・張懷瓘『書斷』(開元十五年(七二七)成書)と韓方明(貞元中〔七八五—八〇五〕頃の人)『授筆要說』(『書苑

菁華』卷二十)の間に王僧虔の撰として偽作されたものであると斷定している。また、新進の書法史研究者薛龍春氏が著者の論の後に發表した「羊欣錄名、王僧虔記事」とする新說に對しては、新たに專論をものして反駁を加えている。

現行本『采古來能書人名』を羊欣と無關係の偽作と斷定したことにより、著者の考える書法理論批評自覺の時期はまた引き下げられることになる。ただし、右の『非草書』の場合と同様、現行本が偽作であるにしても、偽作者が先行する何らかの資料を參照した可能性は否定できず、個別の記事の來歷についてはさらなる考辨が待たれる。

「永明書學」研究」(二〇〇二)は、南齊武帝朝永明年間(四八三—四九三)の書學の動向についての綜合的考察である。このなかでまず重要なのは王僧虔『論書』に對する考辨である。『論書』は『法書要錄』卷一に「南齊王僧虔論書」の題で收められるほか、『南齊書』および『南史』の王僧虔傳、『墨池編』、南宋・陳思編『書苑菁華』、明・

王世貞編『古今法書苑』、『全齊文』におのおの異なる形で收められ、また『太平御覽』卷七百四十八にも三條の引用がある。著者はこれらのテキストと他の文献による言及を精査し、明・毛晉刊『津逮祕書』本『法書要錄』の收める『論書』を、蕭子良『答王僧虔書』と王僧虔『答竟陵王蕭子良書』が混亂を経て一體となったテキストと斷定している。またこの考辨によって、一般に『法書要錄』の最善のテキストとされる『津逮祕書』本が必ずしも張彥遠の原著を十全には傳えていないことも明らかにされ、この論點は後の「關於『法書要錄』原本的探索——從明毛晉刊本與朱長文所見宋傳本比較的角度看」に結實する。なお、大野修作氏も同じ論點から「王僧虔『論書』より『法書要錄』を見直す」（『書學書道史研究』第十六號、二〇〇六）を發表しており、その說に著者と異なるところがある。また、著者の論の後述の薛龍春氏や書法史學の大家叢文俊氏が『論書』についての論考を發表しており、著者はその都度專論を發表して兩氏の說に厳しい批判を加えている。

著者はこの『論書』に加え、王僧虔によって『書賦』

（『藝文類聚』卷七十四）が著されたことをもって、永明年間を書法理論批評自覺の時期と認定し、王僧虔の書法美學思想の傾向を「玄學化（美學化）」と表現している。さらに王僧虔の歿後、永明五年（四八七）以降の竟陵王蕭子良による「西邸雅集」の時代については、蕭子良『古今篆隸文體』、劉繪『能書人名』、王融『圖古今雜體六十四書』といった當時の書學著作を現存資料に見える情報から分析し、その「小學化」の傾向を指摘している。

「永明書學」前後期の特質を「玄學化（美學化）」と「小學化」と説く著者の論は大變意欲的なものであるが、いくつか問題點も指摘しなければならない。まず、著者は『論書』に見える「天然」「功夫」等の語と『書賦』に見える「心」「手」「筆」の説を結びつけ、王僧虔の創作理論と批評理論の一致の現れと説いている。しかし「天然」と「功夫」については、むしろ先行書論との連續性に説き及ぶべきではなかったか。『采古來能書人名』が偽作であるにしても、著者も眞作と判定する劉宋・虞龢『論書表』における「自然」と「字形」の用例を無視するわけにはゆくまい。

また、『書賦』については「先唐詠書辭賦研究」において著者も言及するように、陸機『文賦』からの影響が見逃せない。『文賦』と『書賦』に共通する創作理論としての特質を「玄學化（美學化）」と呼ぶことは可能だと思うが、それをバックボーンの異なる『論書』に結びつけるにあたっては、もう少し慎重に手續きを踏んでもらいたかった。さらに、永明前期の書學をその實王僧虔一人の著作によって論じていることと、後期の著作がすべて亡佚していることも弱點といわざるをえない。すでに述べたように『古今篆隸文體』は中國では佚しているが、日本には完本でないものの大部分を存した抄本が伝わっている。著者が「『永明書學』研究」の時点でこの抄本の存在を知らず、数少ない言及や佚文を基に永明後期の書學の様相を描いてしまったことはじつに遺憾である。また、著者は王愔『文字志』を永明末の著と推定し、これを永明後期「小學化」の集大成と捉えているが、この論にも『篆隸文體』抄本が参照されなかったことは影響しているように思う。そこで、次にはまず著者の『文字志』に對する考辨を確認し、再度永明後

期の「小學化」について考えてみたい。

『文字志』は、『法書要錄』卷一に「宋王愔文字志目三卷」と題してその目録のみ收められ、書物としては亡佚している。内容は目録から窺うに、上卷が三十六種の書體史、中下卷が書人列傳である。著者は先に「王愔《文字志》輯佚」（一九九三）において『世說新語』劉孝標注、『後漢書』章懷太子注、『初學記』、『書斷』に見える全二十三條の佚文を示し、さらに「『永明書學』研究」では、「輯佚」の後に發表された張榮慶氏の論（『書法研究』一九九五年第六期「王愔《文字志》考略」）を承けて『文字志』に本格的な考辨を加えている。著者は『文字志』の成書を永明末と考へ、張榮慶氏の永明五年前後とする説からさらに引き下げているが、兩説に共通する最大の根據は『初學記』卷二十一に見える次の佚文である。

倒薤書者、小篆體也。垂支濃直、若薤葉也。八體書亦圖此法。或云出扶風曹喜。蕭子良以爲仙人務光所作。

最後の「蕭子良」以下は『古今篆隸文體』の説であり、それに言及する以上『文字志』の成書は『古今篆隸文體』に後れるというのが兩氏の意見である。張榮慶氏はまた唐・李嗣眞『書後品』（『法書要錄』卷三）に、歴代の書論家を列挙して「自王愔以下、王僧虔・袁（昂）『古今書評』・庾（肩吾）『書品』諸公」とあるのを引き、これを生年順と見て、『文字志』を永明五年前後、王愔七十歳頃の成書と結論づけている。永明末の成書と考える著者はこの説に賛同せず、『書後品』の順序を「不足爲據」と斷じている。さらに『法書要錄』所收「文字志目」の擧げる書人が東晉を下限とし、宋人の名が見えないのは永明中の著としては不自然に思えるが、この點について著者は、當時王僧虔の書法批評の影響がなお残っていたことと、蕭子良の新しい書法批評がすでに興っていたことに起因するものと推測している。

思うに、兩氏とも『文字志』の成書を『古今篆隸文體』以後としたことから論證に無理を來しているようである。いったい『初學記』の引用は絶対の根據といえるのだろうか。そこで注目したいのが、著者も言及するように『墨池

編』所收「文字志録目」には『法書要錄』所收「文字志目」との異同が多く、特に書人については東晉にとどまらず陳人の名まで擧げていることである。このことから、唐代には原著を増補した『文字志』が行われていた可能性がある。『初學記』の引用についても、このような増補本がある。『文字志』以降に著された『古今篆隸文體』の記述を附加したものとを考えられないのだろうか。また『文字志』が三十六種の書體を擧げるのに對して『古今篆隸文體』は五十二種の多きに及ぶ。著者の説によれば『文字志』は敢えて先行する『古今篆隸文體』からかなり數の書體を間引いたと考えなければならないが、このことについての説明はなされていない。

さて、著者の「小學化」論は、まずもつてその意味内容に分かりにくさがある。著者のことばを素直に讀むかぎり「小學化」が意味するのは、主に傳統への回歸と玄學から儒學への轉換の二點であるようだ。永明後期の書學著作にかかる傾向を認めることが不可能でないとしても、それを「小學化」と名づけることは果たして妥當だろうか。また、

著者は「文字志目」に見える「古今小學三十七家」の語を

永明後期の「小學化」傾向の現れとしているが、『文字志』が永明末の著だとしても、この語は永明後期書學の一著作の一部分を示すにすぎないとは考えられないのだろうか。さらに、著者がこの論の時点で『篆隸文體』抄本の存在を知らなかったことはやはり瑕疵といわざるをえない。

著者は「蕭子良《古今篆隸文體》輯佚」（二〇〇八）と「論

蕭子良《篆隸文體》日本鎌倉抄本（附：蕭子良《篆隸文體》

鎌倉抄本釋文）」（書き下ろし）において『古今篆隸文體』の

佚文と抄本に文獻學的考察を加えているが、その分析にはなお進展の餘地がある。また、著者は後者の論において再度永明後期の「小學化」傾向に言及しているが、著者にとって抄本が永明後期書學最大の資料に躍り出たにもかかわらず、それによる持論への見直しはならなされていない。抄本を見るに『古今篆隸文體』の記事は多く書體發明にかかわる傳説を語るもので、なかには荒唐無稽なものも少なくない。このような著作に傳統への回歸と玄學から儒學への轉換を意味する「小學化」の傾向を認めるのは難し

くないだろうか。

さて、著者が「『永明書學』研究」（二〇〇一）の時点で日本に傳わる『篆隸文體』抄本の存在を知らなかったことは甚だ遺憾であるが、もしも中國大陸の書法學界に知りうる條件がなかったのであれば、それを瑕疵と斷ずるのは酷に過ぎるかもしれない。そもそも『古今篆隸文體』の天下の孤本たる毘沙門堂藏抄本は、昭和六年（一九三二）に舊國寶に指定され、同十年（一九三五）には古典保存會から山田孝雄による解説を附した影印本が刊行された。「鎌倉抄本」というのは中國大陸の學界における俗稱で、山田が同抄本卷末に抄寫された『博聞錄』の年代を根據にその抄寫年代を「鎌倉時代の中期以上に溯るものにあらざるは明かなり」と記したのを不正確に理解したものと思われる。著者がこの日本語を正確に理解しているにもかかわらず「鎌倉抄本」の俗稱にしたがっているのは、その嚴格な學風にいささか似合わないように思う。

著者は、抄本の存在を知きっかけになったのは饒宗頤

氏の論文（『書海觀瀾——中國書法國際學術會議論文集』所收「張彥遠及其書法理論」、香港中文大學文學院・文物館出版社、一九九八）による引用であると記し、その後影印本のコピーを長らく日本に留學していた書法史研究者祁小春氏から譲り受けた由、本書所收の二〇〇八年發表の論文から記しはじめている。なお、饒氏の論文と關連があるかどうかは確認していないが、香港中文大學の黃耀堃氏が京都大學滯在中の一九八四年に『篆隸文體』輯補の初稿を著し、阿辻哲次氏の「蕭子良『篆隸文體』寫卷の研究」（『中國語史の資料と方法』所收、京都大學人文科學研究所、一九九四）發表後に、臺灣『國家圖書館館刊』（二九九六）に發表している。

それでは中國大陸の學者は抄本の存在を域外の學界を紹介してしか知りえなかったかといえそうではなく、中田勇次郎『中國書論史』の譯本『中國書法理論史』（盧永璘譯、天津古籍出版社、一九八七）にこの抄本についての言及があり、著者もこの書を參考書目に擧げている。さらに一般的などころでは『中國書法史・魏晉南北朝卷』（劉濤著、江蘇

教育出版社、二〇〇二）もこの譯本の記述を引用する形で抄本の存在に言及している。著者もこれらの記述に留意していれば、少なくとももう少し早く抄本の存在を知りえたはずであり、さらにもう少し早くその内容を得ていれば、永明書學についての學說も違ったものになっていたかもしれない。本書によって『篆隸文體』抄本は中國大陸の學者の廣く知るところとなったことであろう。これが今後多くの學者の書學研究に活かされることが期待される。

本書の内容については以上として、以下中國大陸の書法學界における著者の研究への反響について述べておきたい。著者の期待する反響は、從來の先唐書學文獻および書法美學・書法批評史に對する理解が大きな問題を含んでいることに研究者たちが氣づき、その問題に對する興味を共有し、その解決のための健全な批判や建設的な意見が多く の立場から寄せられることであろう。しかしながら、實際の反響は必ずしも著者の期待どおりのものばかりではないようだ。たとえば、著者は二〇〇〇年の「全國第五屆書學討論會」

において、書法理論自覺の時期を後漢後期から南齊永明年間へ引き下げる持論を發表し、司會の某著名書法史學者から「現時點で人々はまだ感情的に受け入れられないであろうが、この考えは長きにわたる書學文獻史料考證を基に歸納されたもので、根據も論證もしっかりしていて、一家の言を成している」と評價されたことを記している（略論中國古代書法理論批評自覺的問題）。著者はこの評價に對し謝意を述べているが、著者の提出する問題に感情面から興味の持てない、あるいはストレートに反感を抱く人が多數存在することは認めざるをえない事實である。思うにかかる狀況は、書法界において古代書學文獻研究の目的意識がそもそも共有されていないことにも起因しよう。すでに述べたように、著者の目的は書法美學という學問への還元であるが、書法家としての身分を兼ねる中國大陸の書法研究者には、古代書法理論を現代書法藝術に直接還元しようという意識が強い。藝術はある意味感情的な營爲であり、古代文獻の參照にも感情が影響することは咎めようがない。

また、著者の論に對する健全な批判や建設的な意見が必

ずしも多くは出てきていないことも事實であり、參照されはしても突つこんだ議論に發展していなかったり、あるいは無視されたり曲解されたりしていることも少なくない。書法理論自覺の時期をめぐる著者の問題提起も、今のところ大きな議論を巻き起しているとはいえない。著者は後漢の班固・崔瑗を書法理論・批評の「濫觴」「萌芽」、西晉の衛恆を「初歩自覺」、永明年間を「真正自覺」の時期とそれぞれ認定しているが、このような美學史觀の可能性ないし有効性はいまだ未知數である。書法理論自覺の時期を論ずることが、先唐書法史全體に對する見方を搖さぶることもなるといふメッセージを、著者はさらに發してゆかなければならないかもしれない。さらに他の研究者は、書法史の大局ないし文化史全體から見て著者の論が有効かどうか、檢證を加えてゆくべきであろう。書學研究者は本書の内容を「謙虛にうけとめ、それを越えるものを發表する」よう努めなければならぬし、他分野の研究者には、これを書法學界の定説とは考えず、健全な參照と批判を加えていただきたい。

最後に、本書というよりも中國大陸の書學關係の學術論文全般の風潮に對する疑問ないし苦言を呈しておきたい。

著者は文獻學に明るく、本書においてしばしば版本の問題も扱っているが、一方で『法書要錄』の引用は人民美術出版社の點校本を、その他の著作については多く上海書畫出版社の『中國書畫全書』を用いている旨註記している。なるべく一般に廣く流布している本を出典とするのが學界の慣習なのであるが、學問的に見て感心できる態度ではない。

多くの書學研究者が書論の引用に際して上海書畫出版社の『歷代書法論文選』を用いるのに比べればまだ良心的といわなければならないが、人美本『法書要錄』も『中國書畫全書』も決して完璧な點校本ではなく、まして『中國書畫全書』から引くのは孫引きでしかない。また、著者は『津逮祕書』本『法書要錄』の問題點の指摘に際しても人美本を用いている。確かに人美本の底本は『津逮祕書』本だが、人美本を『津逮祕書』本そのものであるかのように扱うのは危険である。さらに、文獻學的考辨を旗印とする著者が全面的に人美本を使用してしまうと、この本にお墨

付きを與えることになりはしないものか懸念される。一九八四年に出版された人美本『法書要錄』は、六二年の范祥雍の點校と六四年の啓功、黃苗子の參校になり、校訂の質じたいは悪くないのだが、誤植や句讀の誤り、底本の異體字を読み違えている箇所が少なからずあり、これらの誤りはすでに半世紀近く放置されていることになる。もしも學界の慣習がこの點校本の壽命を永らえさせてしまっているのであれば、じつに嘆かわしいことである。

本書を一つの契機として、中國大陸内外の書學が健全な學問としてなおいつその發展を遂げることを期待して稿を閉じたい。

(榮寶齋出版社、二〇〇九年十二月、四七五頁)

〔附記〕 書評の發表をご快諾いただいた張天弓氏、ならびに著者への紹介の勞をお取りいただいた祁小春氏に、誌面を借りて心から謝意を表したい。